

# 牛ふんで循環型農業

## 埼玉工大 エネ地産地消の一助に

【さいたま】埼玉工業大学は尾熊牧場（埼玉県深谷市）グループらと連携し、牛ふんを活用した深谷市内での循環型農業の実現を目指す共同研究に乗り出す。牛ふん成分を分析し堆肥製造の最適化や臭気対策につなげるほか、発電エネルギーを生産・貯蔵し有効活用する。ロシアのウクライナ侵攻で資源価格高騰が懸念される。エネルギーの地産地消の動きが高まる中、その一助とする狙いもありそうだ。

埼玉工大工学部生命工で太陽光発電設備 木村任社長や、牧場環境化学科の本郷昭久 関連事業などを担うホ 関連事業を手がける深谷教授が、尾熊牧場グループメンテナン（同、谷市内の計5社と連

携。埼玉縣信用金庫（熊谷市、池田啓一理事長）とさいしんコーポレーション（同、橋本義昭代表理事）の仲介で実現し1日に共同研究契約を結んだ。5社は循環型農業を推進する深谷企業コンソーシアムとして活動する。尾熊牧場で飼育する



尾熊牧場で飼育している家畜（埼玉工大提供）

家畜約3300頭の牛ふんを活用する。まず、酸、カリウムの含有量は埼玉工大が牛ふんを2-3日で分析する

手法を確立。成分調整から製造する計画だ。将来的にはエネルギーを発生させる。牛ふん発酵により堆肥の提案につなげる。メタンガスを発生させる。堆肥はすでに尾熊牧場グループで販売しているが成分分析は未着手という。並行で悪臭が課題となっている牛ふんの臭気成分も分析。臭気軽減に効果的な吸着剤を農業廃棄物とする。

埼玉工大のノウハウで蓄電し、ビニールハウスで使われる空調や照明への電気エネルギーとしての活用を目指す。